

'70.3月

井深対談

幼いころに“旅”をさせよう

ゲスト：真鍋 博

真鍋 博（まなべ・ひろし）
イラストレーター

教育...強育...共育

井深 伺うところによると、真鍋さんのお子さんの教育方針が非常に面白いということで、ぜひ、じかにご体験を承りたいと.....(笑い)

真鍋 いや、いや、もう、私なんか、自分のとこの話ぐらいしか、できませんから.....。

井深 できれば、真鍋さんが、どういう気持で教育されて、それが、どうなっているか、というところを、少し教えていただくと、幸せでございますがね。それで、相当、意識的に、小さいときから、やられたんですか。

真鍋 そうですね、比較的小さいころから.....

井深 そこら、対談じゃなくたって、真鍋独談だって、いっこうかまいませんから.....八八八八。

真鍋 結局、子どものことをいろいろ考える、というのは.....どの親でもそうですがね、学校へ入れるにしても、塾へ通わせるにしても、みんな、あれ、未来学ですよ、ね。

井深 うん、うん、なるほど。

真鍋 未来学というと、何か、科学技術みたいに考えられちゃうわけだけでも、ぼくは、生活の中にも未来学があるんじゃないか、と。だから、保険にはいるとか、貯金をするということも、未来学ですよ。

井深 うーん、ははーん。

真鍋 家族で旅行にいこう、こんどの日曜日、何々をしよう、というのも未来学だし.....その中で、一番大きい未来学は、子どものことだと思うんです。そして、自分で、どうやろう、やらしてみよう、と思ったって、結局、結果は、十年なり、十五年なり、たってみないとわからない。

井深 自分では果し得なかった夢を、第二世に果させる、という要素も大きいですよ。

真鍋 そうですね。ところが、いろいろ、ぼく、そういうの見ていましてね、その夢のかけ方というものが、少しちがうんじゃないかと思うんです。ある人は、自分の子どもの頃とおきかえてみて、大変貧乏だったから、おもちゃが買ってもらえなかった.....とか、うまい物食えなかったけど、いまは何でもあるから、せめて、うまいものを食べよう、なんていうのもあるでしょう。それ、自分の子どものころ、できなかったことを、自分の子どもには、やらせたい、と.....つまり、足していくわけですね。ぼくは足し算だと思うんですよ。

井深 はい、はい。

真鍋 だけど、例えば、自分たちの子どもの頃は、野原があった、土いじりも、木登りもできた、海でも泳げた、ということで、子どもを、あちこち連れていく.....。そういう場合、至れり尽せりで、ついて行って、汽車にものせ、バスにも乗せ.....いも掘りをさせれば、手袋もはめさせて、手を守ってやる...。ぼくは、これはむしろ、足し算じゃなくて、引き算だと思うんです。

井深 うん、そりゃもう強制ですよ。

真鍋 だから、算数でいうなら、親ってというのは、足し算をやったり、引き算をやったりしているんだ、と思うんです。時代は、こんなに変化が激しい……昔はいろいろ夢を抱いても果せなかったけど、いまなら、どんな職業でも成り立つ。ぼくら、子どもの頃は、絵を描こうと思っても、親が反対して、かけなかった。こういう時代になってくると、何でもできるんですからね。ぼくは、足し算でも引き算でもなく、掛け算ができるんじゃないかと思ひましてね。

井深 なるほど。

真鍋 教育、教育っていいですけど、教えて育てる教育もけっこう……それから叱咤激励して猛烈にやる、強い……強育もまたいいわけなんですけれども、私の場合は、子どものためにも、ぼく自身のためにもなる、ということで……

井深 ははあ。ぼくのためにも、ですか……

真鍋 ええ、ともに育つ……その“共育”というものがあってもいいんじゃないか、と。ぼくは、おかげで、だいぶともに育ってるんです。

井深 その掛算の話ね。私、いま一生懸命、電子計算機を勉強してるんですけどね。非常にあなたの話、よくわかるんだな。掛け算の式を電子計算機に覚え込ませることが必要なんだけど、Aを掛けるのか、Bをかけるのか、Cをかけるか……これはきめるべきじゃないんですね。

真鍋 そうですね、ええ、ええ。

井深 とかく、ABCを、おとなはきめてしまって、それを子どもに与えるのだけど、あとで、どんな変数をかけられてもいいような式を、電子計算機に教え込ませることが重要なんです。子どもたちが大きくなった時に、勝手な変数を入れりゃいいんですけど……その時に、親から教え込まれた数字しか入れられない掛け算だったら……これじゃ足し算と同じことなんです。

性教育もゼロ歳から

真鍋 ぼくんとくろじゃ、おもちゃなんかも、結構買わされますし、買ってやりますし……むしろ、少し遊び方が足りないんじゃないか、というふうに気をつけてるんですけど、決してできあがったおもちゃは、買ってこないんです。自分で組み立てないと、ぜったい使えないものを。

井深 それが貴重ですよ、ね。

真鍋 簡単なものじゃ面白くないから、時には、少し、手のこんだものをやるんですよ。そうすると、やっぱりできない……と、涙、ポロポロ出しますね。

井深 ハッハッハッ。

真鍋 サルがラッキョウの皮をむいてるようなもんです。泣きながら、組み立ててますよ。だ

けど、できない時は、自分ができないんだ、と、わかってますから、別に、親に助けに来てとはいいません。それから……何ていったって、組み立てないことには、遊べないから……そりゃ、必死でやっています。

井深 それが、私、教育だと思うけどね。いまの教育の中に、その“達成した喜び”というものが、ひとつもないんですよ。

真鍋 何でも結果を与えてしまうものだから……。話がえらくあっちこっちとびますけどね、最近、性教育のこと、NHKあたりでとり上げていますけど、ぼくは、そりゃ性教育結構ですけど、性に対する子どもの疑問っていうのは、あれは疑問じゃなくて、好奇心なんですよ。別に性に関心を持ってるわけじゃないんですから。三つ、四つの子どもが、もしそういうこと、きいてきたら、子どもが、何故？ってきくのは、大変いいことなんですから、知りたいと思ってるときに「じゃ、こうなんです」って、ドカンと教えてしまって、子どもがわかってしまったんじゃ、そりゃ、教育はできたかも知れないけど、ぼくは、何の効果もないと思う。やはり、教えたって、教えられはしないわけなんですから。

井深 うん、そりゃそうですね。ハッハッハッ。

真鍋 教えられやしないんだから、それより、いろいろ話はしてやるが、子どもが、不思議だなあ、おかしいなあ、と、もっと思わせる、ということ……

井深 私もね、性教育に対しては、少し意見があるんです。性というものに対して、おかしいものであるとか、猥雑なものであるとかいう観念が、どんどん育っていく。これは、おとなが、かくそう、かくそうとして、子どもは触れるべからず、というふうにする。それで好奇心というものが出てくるわけでしょう。だから私は、ある程度スクリーンをとり払って……法律もじゃましてることになるかも知れんが、性が汚いとか、かくしておくべきものとか、そういう考え方がまちがっていると思うんです。

真鍋 ええ、ええ。

井深 これは、なんでも言えることでね、例えば、ベートーベンの音楽はむつかしい、と、おとながきめているんですよ。もっと極端に言えば、単音はやさしくて、ハーモニーはむつかしい、というけど、はじめて音を覚える赤ちゃんにとっては、実はハーモニーも単音も、同じなんです。同様に、性の問題でも、わりとあからさまに、ま、親は少し顔を赤くしなきゃならないかも知れないけど、子どもにとっては、“なんじゃい”といったところで、当り前のことにしてしまうんじゃないかな。非常に神秘的な部分は、どうせわかりっこありませんけど…。おかしいことだとか、かくしておくべきことであるという感じを与えない方が、いいんじゃないか……そのためには、はやく、みんな教えちゃっておいの方がいい……と私は思うんですがね。

真鍋 ええ、ええ。そう、子どものわかること、おとなのわかることと、ちがいますからね。ですから、ぼくは、何歳からはじめなきゃいけないっていうことはない……一歳からでも、零歳からでもはじめてもいいし……。

井深 ほうっとくと、ますます曲がった、ひずんだ、いやらしい受け取り方をしますよ、子ど

もは。七、八歳になったら、字が読めますから、何だって読んで、妙な受けとり方をしちまうから、その前に正しい概念を与えとかなくちゃならん、という気がしますがね。

真鍋 そうなんです。例えば、セックスも大変社会化していて、オッパイが出てきたり、ポインが出てきたり……そういうの、テレビからどんどん聞いて知ってるわけですよ。

井深 それを猥雑なものにする必要はないわけですよ。明治時代に、はじめて裸体画を飾ったときにね、体の一部に紙をはった、という話があるんですからね。

真鍋 ええ、黒田清輝さんの“朝粧”という絵ですね。

井深 その、紙をはったのと、同じことを、いまもって繰り返してるんじゃないか、というのが、いまの私の気持ですな。

真鍋 ああ、なるほど、まさに現代版ですな。

井深 いや、こりや、横道へそれてしまった。

交通標識を音でもきく

真鍋 さっきのお話の……これとこれを掛ければいくつになるっていうことを教えるんじゃないか、掛け算そのものの考え方や生活のし方だけを教えておいて……実際には、何が出てくるかわかんけど、という……そういう教育ですけどね。ま、私のところでやったのは、子どもをどこへでもいかせる、ということなんです。ぼくのところじゃ、ぼくが家にいて絵を描いているものだから、どうしても調べ物なんか、女房に手伝わさなくちゃならない。そうすると、実は、あまり子どもをかまっちゃいられないわけなんです。外へ出たら危いからって、うちの中へとじ込めてばかりいる羽目になるわけです。しかし、そんなこと、できっこない。それである時、子どもを一度、外へ出して、遊んでるのを、ぼくが、かくれて見ていたんです。そしたら、子どもっていうのは立派なものだと、ぼく、思ったんだけど、本能的に車に気をつけますね。路地なんですけど、遊んでるところへ、向うからクラクションが鳴ったりすると、パッと起きて、道の端へ、へばりついてますよ。そうして通りすぎるのを待っているんです。ぼくは、それを見て、こりや、ま、暴論だといわれるかも知れないけど、子どもを、どんどん、外へ出そうと思いました。「大変こわいんだ、気をつける」ということは、よく言ってきかせまして……。

井深 いや……また、お話の腰を折るみたいだけど、松本の鈴木先生のお話だけど、小さいときからバイオリンやってる人で交通の災害を受けた人はないそうですよ。

真鍋 なるほど……は一ん。

井深 反射神経だか何だか知らないけれど、バイオリンをちゃんとやってる人で、交通事故を蒙った人はいませんっていつておられました。こりや、ちょっと、考えなけりゃならんことですね。

真鍋 はあ、はあ。ぼくの方も、話がとびますが、そういうことから、ぼくは、交通標識を、目に頼っているだけじゃいかん、と思ってるんですよ。車を運転するときは、よそみをす

るなっていっていながら、交通標識いうものは、大体見えないところへ立ててるんですよ。

井深 ハッハッハッ。

真鍋 だから、その瞬間は、よそ見しろって、いってるわけでしょ。この前も、東名高速の建設部長と対談してましてね、見る標識っていうのは、限界があるんじゃないだろうか、と。おまけに、情報が刻々に変化して、雪があるとか、横風が強くなりそうだとか、どこで事故が起きている、とか、こりや、看板じゃ、とてもじゃないけど、伝達できない。ハイウェイの下に線を入れて、音で伝える……どこかチャンネルをあけておいて、そういう連絡は音ではいる、ということにしたらって……。

井深 アメリカのリンカーントネルなんかでは……ラジオはトンネルへはいると聞えなくなりますよね、それ、必ず何K Cにあわせろって看板が出ているんです。

真鍋 ははーん、なるほど。

井深 合わせますとね、そのトンネルだけの誘導で、音楽もきこえるし、交通状況も、機に応じて情報を伝える。トンネル出たら、またきこえなくなりますけどね。こういったことは、たしかに、ハイウェイをやってくには、必要であるかも知れませんね。部分的に、音で注意したり、道案内、名所案内……そりゃ名案で面白いですね。

真鍋 ええ、全部じゃなくていいわけですが、標識というものを、音にしてみるってのは、やらなくちゃいけないんじゃないか、と……

井深 助手が乗ってればいいけど、ハイウェイは、止めて地図を見るわけにいきませんでしょ。どの出口でどうっていうの、もう非常口が前もってわからなくちゃならないからね。

真鍋 岐れ道へ立って、道標を見て、左へ何キロっていうわけじゃない、左へ曲がるためには、あらかじめ、左へ寄ってなきゃいけない。これも未来学だと思うんです。

井深 標識にしても、たしかに、もうちょっと考えた方がいいようですね。

真鍋 いまや、町の看板やネオンの方が、よっぽどすばらしい。看板は看板でもいいけど、もっと光をいれるとか、色が変わるとか……もっと目につく方法っていうのは、あると思うんですね、電氣的に。情報っていうのは、もう、ああいう看板の時代じゃないですよ。もっと、エレクトロニクスの開発を、交通信号の分野でも、やらんといかん。

井深 視角っていうのは非常にせまいですからね。音はその点、非常に広い。ただ、アブセントマインドということはありますけども、車の場合は。けど異様な音だったら、たいていきこえますがね。

真鍋 子どもは、その点……音にかけては、非常に敏感ですね。車がきたっていうのも、むしろ音でハッとよけてます。だからぼくは、比較的、交通戦争にノイローゼにならないで、思い切り、子どもを外へ出しましたよ。迷い子になっては大変だから、自分のうちのまわりの地図を自分でつくってね。自分で自分の行動半径を探検するわけですよ。

井深 なるほど。

真鍋 家があって、路地があって、なかなか面白い地図ができますよ。

井深 それ、いくつぐらいのとき？

真鍋 これは、四つぐらいでしたね。五つぐらいが最高でしたね。ぼくとたまに、おもちゃやへ行こうなんていうと、この道がいい、近い、なんて……そりゃもう、とても普通の道じゃないですけどね。よその家の軒先通ったりしましてね。

井深 探検して発見していくところが面白いわけですね。

真鍋 何ていったって、家へ帰れないと大変ですから、あちこちみながら行くわけです。ですから、たまに銀座なんかに出ますと、最近では地下街が非常にふえましたね。上の子ども……いま小学校四年になりましたけど、地下街なんか歩きましても、子どもの方が先に、あっちだ、ここだって、よく見て、見つけます。先にスイ、スイ、と……

井深 訓練されてるわけですね。

真鍋 必要に応じて、ですよ。

十円玉ひとつもって

井深 非常に遠いところまで、小さいお子さん方を、旅行にお出しになったとか？

真鍋 ええ……男の子二人、いま四つと四年生なんです。それで、もう、しょっちゅうけんかしているんですけどもね、旅行させるとなると、これは二人、相当協同しないとね……。アポロ飛行士じゃないけど……

井深 四国までやられたという話、ぜひくわしくお願いします。いったい、いつのことですか？

真鍋 去年です。三つと、小学校三年生ですから九つ。

井深 三つと九つ？

真鍋 それまでには、夏になれば海へ行くとか、スケートに行くとか、いろいろやりました。これも、こっちでお膳立てはしないで……。

井深 してあげないのですか、全然？

真鍋 ええ、切符も買いに行かせるわけです。例えば江の島みたいなところへ行かせるとなると、短い距離だけど、やはり子どもとしては、流線型の電車に乗りたいたいわけです・あの、音の出るやつに……

井深 はい、はい。

真鍋 あれに乗るっていうことになると、これは指定席の券を買わなくちゃ……そうすると、やはり、子どもが小田急の新宿駅へ切符を買いにいかなきゃならん。

井深 プランニング……デザインですね。

真鍋 ええ、それで、自分で買いに行って、行列に並んで、切符買って……。だから先生が「お宅の子どもさんの作文は……どこかへ行ったときのこと書かせると、みんなは行った先のこと書いてるけど、お宅のは、行く前のこと書いてる」というわけです。出掛けるところまで、なかなかいかないわけです。

井深 ははーん。それで……江の島へ、一人でいくんですか？

真鍋 いや、もちろん、ぼくなんかも、ついて行きます。

井深 お供？

真鍋 いや、ぼくはお供っていうのはいかん、と思って……。義務として、繰り合わせて子どもについていく、ということはしません。

井深 お父さんの切符も、みんな、子どもさんが、プランニングして買ってくるわけですね。

真鍋 そうです。で、ぼくも、子どもの犠牲にはならないんです。例えば、子どもは土曜の朝からいきますよ。ぼくは土曜は仕事があるから、夕方からいく。そりゃ旅館は、前もって電話しておいて……

井深 ああ、そうですか。

真鍋 二人で先に行くわけですよ。そして夕方までさんざん泳いで、夕方、赤い顔してね、ゴムゾーリをはいてですね、迎えにきたりするわけです。おふくろは次の日にきましたり…
…ま、帰ってくるときは、いっしょですね、お互い疲れてますし……。

井深 いくつぐらいから、そういう習慣になりました？

真鍋 “放し飼い”は三つ頃からですね。

井深 乗り物にのせたのは？

真鍋 乗り物は四つごろからです。上の子は四つごろからですけど、下の子は、もう、兄貴がいますからね。

井深 はじめはやっぱり連れて行って、ルートは覚えさせるわけですね？

真鍋 そんなに無茶は、こっちも心配ですからやれませぬ。

井深 計画的にやるわけですね。連れていく場合も、次のステップを考えて……。

真鍋 ここまできたら、こんど、これ、できるだろう。だから最初は一つところだけ行って帰ってくる、次はここへ行ってから、ここへ行くっていうことをやらせる。ただ、ここから、こっちへ行くとき、その地図は書かないわけです。

井深 はあ、はあ。

真鍋 例えば新橋へ行って、有楽町へ行って帰ってくる、ということにしますね。そうすると、新橋へ行け、ここで、こういうことをやれ、終わったら、新橋の駅で「有楽町へはどう行くんですか」ということを、誰にでも、じゃないけど、駅の切符のおじさんとか、交番のお巡りさんとか、そういう人にきけっていうんです。向うは大変めいわくかも知れないけど……

井深 ハッハッハッ。いや、教育だから……。

真鍋 それで、うちの息子が、はいつて行ってきくわけですね。そうすると、向うも、ちゃんと教えてくれますよ。子どもには、そりゃ、親切ですよ。子どもは、それをきいて行くわけです。そしてまちがいなく帰ってくる。そういうことするにもやっぱりこっちは心配ですから、その準備の方がいるわけですよ。例えば……必ず、十円、いつもポケットに入れている……。

井深 財布を落してもいいように……

真鍋 十円硬貨を小さいポケットに入れて、ボタンをかけとく……と、何かあったら……気分

が悪くなるとか、わからなくなったら、自分のうちへ電話をかける。電話番号はよく教え込んである。「もし、かけちがったら、もうないんだから、命綱は絶体切るな」と。十円玉、二つやっくと、安心するから、いかんです。十円玉、一つしかないわけです。

“九歳と三歳”の大旅行

真鍋 最近、十円で買えるものは、ないわけです。電車区間の子ども料金だって、最低二十円。学校へ行き出しても……いまでも十円玉がポケットにはいってるわけです。ぼくのうちは信濃町で、学校は四谷なんです。一駅ありますが、ぼくは電車に乗っていかせないんです。歩いていさせる。すると友だちがね「お前のうちは貧乏なんだ」という。「二十円ありゃ電車に乗れるけど、お前はいつも十円しか持ってないじゃないか」と。そうすると「ぼくんところは貧乏だって、友だちがからかう」っていつてくるわけです。よくきいてみると、定期券っていうのが持ってたいわけですね。あの中に王とか長島の写真や、漫画なんか入れたいわけですよ。

井深 ああ、それがほしかった。

真鍋 それじゃと定期券買って、それに十円玉を入れてるわけですよ。その代り、朝は歩いて行け、帰りは乗って帰れ、ということにしたんですよ。往きだけ歩いて、帰りは電車……定期を見せてね。

井深 はーん。いや、そういう子どもの欲望ってのを見抜いて、満足させてやれるものは、させてやらなきゃ嘘ですね、子どもっていうものには。

真鍋 やっぱり、ぼくらの子どもころと、いまの子どもと、持ち物も興味もちがいますからね。だけど何となく、こっちも感じることはできるわけですよ。話してるうちにわかるわけですよ。

井深 ほほえましいなあ。

真鍋 旅行っていうのも、いいんですけどね、ぼくのところでたまに子ども連れたり、家族でどこかへ行くときは、ドライブマップなんかない、勝手な、我が家だけの旅行をしたいと思うものですからね……東京に住んでりゃ、隅田川をさかのぼって行ってみたり、いろいろ旅行しますけど……ぼくは四国で生れたんです。四国……瀬戸内海に真鍋島っていう島がありましてねえ、真鍋神社っていうお宮まであるんです。村上水軍の、それも下っ端の方でね、散々悪いことやってたらしいんです。

井深 いや、そりゃしかし名門……

真鍋 いやあ、殿様じゃない……だけど島だけはあるし、はっきりはしてるんです。それでね、旅行にもいろいろあって、例えば「先祖旅行」なんての、あっていいだろうと思うんです。自分の先祖をさかのぼって……。ぼくは四国の高校を卒業してから、美術学校へはいるんで、吉祥寺に住んでましてね、それから西荻窪へ移って、だんだん新宿、信濃町、と都心へきたんです。よそとちがって、逆にだんだん中央へはいつてきた……それをさかのぼっ

てみるのも、たまにはいいじゃないか、と。

井深 ふん、ふん。

真鍋 それで、女房に連れていかせましてね、西荻窪と、次の日、吉祥寺へ……。 「おやじは、昔、学生のころ、ここにいたんだ、ここで絵を描いていたんだ」 って。 帰ってきましたね、木造のアパートがあったりして、コンクリートの家じゃないじゃないかって……。 家ってのはコンクリートだと思ってんですね。

井深 ははあ。

真鍋 それで、その続きに、四国へ行かせたんです、二人で。 これはだいぶ無茶なことをしたんです。 おじいちゃん、おばあちゃんに、電話だけはしときまして…… いろいろ着くから……と。 飛行機も使いました。 特に大阪から四国までは、車でいくと、船に乗りかえたり、複雑なもんで……

井深 いくつ、といくつ？

真鍋 九つと三つです。

井深 はーん。

真鍋 二人で手をつないで、いくわけですよ。 こりや、活字になると、非難されるかも知れないけど、大阪・松山間の飛行機…… 飛行機ってのは、親がついていないと…… 親同伴でないと、乗せないんですよ。

井深 あ、そうですか。 そういう規則ですか。

真鍋 小学校へはいった子なら、スカイメイトじゃなしに、ジュニアパイロットっていうのがあるんですよ。 半額でね。 スチュワデスが預ってくれて…… その代り必ず空港まで親が来て引き渡して、向うもちやんと迎えにきて……。 ところが子どもだけで、おまけに三つの弟を連れてくなんてのは、ないわけですよ。 そりゃもう、無茶ですよ。 で、一計を案じてね、伊丹の空港に着いて…… あの空港は、なかなか複雑ですよ。 でも「松山行」っていうアナウンスがあったら、行け、と。 その時二人だけでトコトコ行ったら「ママは、パパは」ってきかれるとまずい。(笑い) 嘘言え、とは教えられませんからね、たいてい、お父さんみたいな、お母さんみたいな人がいるから、そういう人のあとについて、改札口を通れ(笑い) その二人についていきゃいいんだ、と。 きっと適当について行ったんでしょう。 ちゃんとゲイトをくぐって、中へはいいつらしいですね。 はいったのはいいんだけど、乗る前になって、下の三つのが「オシッコがしたい」と言い出した。(笑い) だけど、これ、引き返すわけにいかないんですよ。 もう、ゲイトインしてるんだから。 そこで兄貴は考えた。 これ、シオンベンさせるか、がまんしろ、というか……。 そりゃもう、必死ですよ。 ついに、がまんさせたらいいですね。「乗れば、いくらでもやれる」と(笑い) 三つの子どもも、もう、オチンチンつまんで、がまんして……

井深 これは悲壮だな、ハッハッハッ。

真鍋 乗ったんだけど、やっぱりベルトしめて、飛んで上ってからじゃないと、離してくれないでしょ。 ついに洩らしたらいい。(笑い) 洩らして、少しシートが汚れて…… そしたら、

スチュワデスがスプレーみたいの持ってきて、プーッとやったら、しみが、またたく間になくなったっていうんですね。いいものがあるなあ……。(笑い)それでまあ、飛行機が着いて、おじいちゃんが迎えに来て、空港から電話かけてくれて、そいでまあ、こっちも安心しましたがね。

島じゅうを歩きに歩く

真鍋 それでこんどはまた、うちのおじいちゃんが、これ、おおいに子どもを鍛えてくれてね、毎朝六時ぐらいに子どもを起して歩くんですね。そして、お前らのおやじが、子どものころ遊んだお宮に行こうとか、どこへ行こうとか、島じゅう連れて回って……。年に二回ぐらい、冬休みにもやるんですけど、冬なんか霜が降って、息が白くなるような時でも、子どもたち、顔、真赤にしながら、一生けんめい歩くんですよ。物凄く歩きましたよ。そして元気になって帰ってきますよ。

井深 私も思い出があるなあ……小学校の三年生ぐらいの時にね。私は愛知県の安城というところで、じいさん、ばあさんと住んでね、母は神戸へ再縁したわけなんですね。で、どうしても行きたいって、駄々こねて、汽車に乗って、一人で行く決心をしたわけなんですよ。そしたらその日に、じいさんが発病しましてね、駅へも連れてってもらえないし、やめたっていう電報を打つことも忘れてらしいんです。もう、何月何日、一人で行かせるってこと、いってあったわけですよ。こっちはこっちで大さわぎしてるから……向うは着かないもんで、電報がきて……えらい心配させましてね。その夏休みには、私、一人で行きましたっけ……愛知県から神戸までね、あれ、車掌さん、時々変るんですね。

真鍋 途中でね。

井深 そのたびに、車掌さんが、ご機嫌伺いにきてね「どうして一人でいくんだ」とか「おなかすかないか」とかね。わざわざききにきてくれたこと、思い出しますよ。

真鍋 親の病気といえ、ぼくも小学校の入学式の時、おふくろがちょうど病気になりました……入学式といえ、名札つけて、親といっしょに行くんだけど、ぼくはおふくろがこなかったんです。一人で入学式……そしたら、えらく先生がほめてくれてね。ぼくとっちゃあ、別に……なんでほめてくれるのか、さっぱりわからんわけです。親がこられなかっただけの話で……。そんなわけで、うちの子どもには、割合、何でも自分でさせるわけですよ。パンツとハンカチは三つの時から自分で洗う。ハンカチは、パーッと洗ってはっておけばいいし、オシッコ洩らしたときに、文句いったり、お尻つねったりしたって、しょうがない「出たものはしょうがないが、洗うのは大変だから、洗え」というわけですよ。(笑い)で、洗ってますよ。

井深 今の世の中って、過保護ってことが、一番大きな問題でしょうねえ。大学の入学式まで母親が……

真鍋 この間も衆議院の初登院で、二十七歳の最年少議員の初登院に、お母さんがついていく

んですから。(笑い)大学の入学式、入社式、親がついていくのは、今やあたり前ですよ。それはいいけど、結局、二十一世紀に生きるのには、やっぱり、いまの子どもたちなんだから、その子どもたちのことを考えた場合に、何が一番大事かっていうことをね……

井深 基本になるか……

真鍋 ……力になるかってこと……別に出世してもらおうとも思わないけど……

井深 どんな時代になっても、自分で切り開いていく……

真鍋 ええ、切り開いていく……結局、車を運転してるようなもんです。こんど曲がろうとか、こんど右折するから、そろそろ寄っていようとか……

井深 状況をみながらね。

真鍋 ガソリンが切れそうだから、こんどのスタンドでガソリンを入れよう、とか、車を運転してても、いまや情報を、絶えず受けてるし、未来を見てるわけですね。ぼくは、人間の生きること、そういうことだと思っんです。そういう場合に、自分で決断が下せる人間になればいいと思っんです。そういうことで、ま、一人で旅行させてみたり……

井深 非常に面白いなあ……これは。

真鍋 それで、子どもは、何でもパッパッとやることだけはやりますよ。ふだんはけんかしてても、旅行の時は、お互いがお互いを信じてますからね。

井深 九つのが三つのを連れて……そりゃ責任感ありますね。

真鍋 ええ、トコトコ……洩らした時はき替えパンツも持ってるわけです。(笑い)

井深 しかし、飛行機に乗ってからは、もう、連れがないことパレちゃったでしょう？

真鍋 パレちゃったですね。オシッコ洩らしたって、お母さんどこからも出てこないもん。(笑い)そこがまだローカル線だね、スプレーかけて、めんどろ見てくれるってところが、いいところですね。子どもに道をきかせましてもね、交番へ行ってきかせたら、ちゃんと、教えてくれますよ。とんでもない人にきいちゃいけないんだ、ということをやっとけば……

ラーメンで味覚教育

井深 アメリカの話になりますがね、うちの副社長が、一年か二年ほど、あちらへ住みましてけどね、その時、行ってすぐに、全然ことばのわからない子どもを……幼稚園と小学校の初年度ですよ……三人、サマーキャンプにあずけちゃったんですね。

真鍋 ほう！いきなり……

井深 いきなり。ワーワー泣き出されても、先生、何もわかんない……

真鍋 そりゃそうだ、日本語で泣いてるんだから。ハハハハ。

井深 で、うちに電話がかかってくるんですね。「何をいってるんだか、さっぱりわからない。きいてくれ」。電話でワーワー泣いてるの「何だ」っていったら、みんなは、ああいう上靴はいてるのに「ぼくはないから、それが買ってほしい」のだったという……それだけのこと

なんですって。それから、あわてて、飛行機で行って、靴を届けた。(笑い)アメリカって
いうと、そういうこと、やるんですね。サマーキャンプで、夏休みが非常に長いから、
生活をともにしてね。親から全く切り離されて……その中でお互いの社交ということも、
生れてくるんですよ。そこらへん、だいぶ、日本とはちがいますね。

真鍋 はーん。そりゃ、第一、ことばも覚えるでしょうし……。

井深 ことばを覚えざるを得ないですよ。人間ってのは“ニーズ”ということが非常に必要で
すね。それによって考えたり、行動したりするということね。

真鍋 ですから、おもちゃでもね、つくらないと遊べないわけですから……ゲームをパッと与
えちゃうんじゃなく「これ、組み立てて遊べ」って……。そりゃ、結構、ちゃんとやりま
すね。

井深 話は別だけど、ぼくの友だちが自分の八歳の子どもに、卓上計算機を使わせた実験の記
録を持っているんですよ。おもしろいんだ、これが……。八歳でね、自分でプログラムを
開発してやっていけるんです。

真鍋 うーん、なるほど。

井深 自分で掛け算の変数を自由に与えて……それから、また次のものを自分で生み出して、
それへ掛けていく……単なる掛け算じゃなくて、何乗かに発達するような気がするんです
ね。私は、もうぜひ、お宅のお子さんのために、おすすめしますね。

真鍋 ほほう……それ、やらせたいですねえ。子どもってというのは、なかなか大変な物の見方
をするわけですね。例えばぼくは去年、アポロが打ち上げられたときに、子どももいっし
ょにうちでテレビ見てましてね。なるほど、と思う見方をするから、テレビの座談会なん
がで、そういうのぶっつけてみると、科学評論家の先生方なんか、困っちゃったりしまし
てね。ぼくはいろいろ絵を描きますけど、そういう物の考え方のうえで、子どもの発想っ
てというのは、非常に役に立ってます。ぼくがね一番鍛えられるのはね、フロへはいった時
です。

井深 ほう。

真鍋 こどもがいろんなことをきくんですね。こっちは、少しフロの中へ入れさせようと思
うと、多少、話がないと、もたないですよ。全く千夜一夜ですよ。で、いろいろ子どもと話
をします。おとなしくしてれば、こんど何を買ってやる……とかじゃ、絶体、もたないで
すね。相当こっちもがんばらないと駄目だってことですよ。創作したり、ひきのばしたり
……汗だく……(笑い)

井深 旅をさせたり、おもちゃをつくらせたり……

真鍋 そういうことがいい、と思ってるから、親はやってるけど、それが十年たち、十五年た
ち、結果的には、どうなるかわからない。女房がいうんですね、沖縄は核抜き、本土並み
でいいけど、家の中は核抜きになったらだめだって……。まず“ミカク”……味覚なんで
す。インスタントラーメンもいいが、ただお湯だけをぶっかけるな、っていうんです。お
湯をぶっかけたのなら、友だちの家へ行っても、どこでも食べられるし、同じ味だ、と。

うちは、ネギをきざんで入れたとか、竹輪をのせたとか、いうことで、よそとちがえば...
...家とよそとはちがうんだなあ、と子どもは思うだろう、と。

井深 母親の味をネギによって出せ、と。

真鍋 きょうはネギ、あしたは何、というふうにすれば、「ははあ、少しちがうわい」と思う。
ぼくは「これからは決断である、選択である」ということをいわれるけれども、子どもに、
これと、これとがいいんだ、なんていったって、わからせられない。だから、三つのころ
には、味で、物のちがい、ということをお教えたんです。たまにいっしょに出ますとね、ラ
ーメン屋に寄るわけです。そこらの町のラーメン屋でも、有名店でも食べてみる。そうす
ると、ラーメン、みんなちがいますね。

井深 ハハハハ。この教育はいい。

真鍋 うまい、まずいじゃない、こどもはそんなの、わからないし、値段のことなんか、先入
感になりませんから...(笑い)有名店のラーメンはまずいって.....。

井深 そりゃ、うまくないラーメンで、訓練されたんだな。

真鍋 だけどね、ちがうってことはわかる。物のちがいはわかる。物はちがうんだ、というこ
とです。そういうことで.....味のラーメン教育。

井深 味覚ってのは、どうも、三、四歳までにきまっちゃうらしいですな.....。

真鍋 そうですか？

井深 その時に、どういうものを食べさせたか.....

真鍋 じゃ、うちは少し、味覚教育は、おそかったかな。

井深 だけどあんまりぜいたくな味を覚えてね、これがおいしくて、あとの味はまずいんだ、
ってということになると、その人は不幸なことになるかも知れませんね。

真鍋 高いものはうまいってこととは.....子どもの味覚はちがいますから.....。

井深 そりゃもう、おふくろさんのつくったものが絶対だから.....。

真鍋 ラーメンでもいろいろあらあな、ってことはわかる.....おもちゃもいろいろ並んでるけ
ど、みんなちがう。人間てのもみんなちがうんだ、と、そういう物のちがいというものを
.....それだけは見事に、子どもたち、覚えますね。

“ 育児中絶 ” と “ スポット教育 ”

井深 私の非常に仲の良い友だちに赤ちゃんが生まれましてね。これに、一つの音楽ばかり聞
かそうっていうことでね、バッハの組曲の二番っていうの.....どういう曲か、私、知らん
けど.....これをかけて、お母さんが抱いたり、ねかせたりしてきかせてた。三ヵ月目のと
きにね、明らかにリズムに乗って動くんだそうです。

真鍋 ほう！

井深 そいで、曲のおしまいのところで、非常に激動的になると、これがはっきりわかる.....
大きくなるんだそうです。そして、曲がすんじゃうとね、怒るんだそうです。

真鍋 ほう！なるほど。

井深 三ヵ月です。鈴木先生の実験で、五ヵ月の赤ちゃんが、ビバルディの協奏曲がわかって話……これは有名ですけど三ヵ月の子どもが、わかったんですね。おそらく、お母さんがその曲を流しながら、抱いて、揺らしていた、ということが、条件反射的に泌みつけたのかも知れませんがね。ともかく、そういう能力っていうものがあるんですよ。ゼロヵ月から、もう油断はできないんですね。育児は翌日ヵ月から始まらなきゃならないという……

真鍋 ああ……そうですね。昔は、こどもあまり祝福されないでできて……できたからしょうがないっていわれた子どももあったけど、いまはずい分、計画的に産んでるわけですよ。

井深 産んだからには、これ……

真鍋 だから……せっかく難関を突破して生れてきて……

井深 何億分の一で……ハハハハ。

真鍋 それで、ぼく、放ってしまったら……妊娠中絶もいいけど、ぼくは、そりゃ“育児中絶”だっていうんですよ。

井深 “育児中絶”いいことばだ、これはいい！これはひとついただきましょう。“育児中絶”…パテントないでしょうね（笑い）

真鍋 ありません。どうぞお使いになってください。はやらしてください。字引にはありませんけど、いま、ぼく、それがあと思っていますよ。

井深 大ありですよ。だから、われわれが幼児開発協会をやってるんですよ。われわれは中絶どころか……最初のところを掘り起して……お母さんとの、本当のコミュニケーションというものを求めているんです。おっぱいがほしい、おなかがすきました、というのを受けとめて、さ、こうしてのましてあげるんですよ、と……これがコミュニケーションですよ。赤ちゃんの方で、自分がこういうアクションをとったら、こういうことになるんだ、ということ、動物的に覚えて、それをくり返していく……。最初、動物的なくり返し、動物的なしつけ、っていう時代……おそらく私は、二年ぐらいで、この時代は終わってしまうんじゃないだろうか……

真鍋 ふん、ふん。

井深 満二歳ぐらいになると、もう、自分の意志というものが相当出てくるわけですね。そうしたら、その意志というものをある程度、尊重すべきだと思うんです。だから折檻するにも、満二歳以前に鞭を使えばね、鞭と感ぜないしつけっていうものが、できるんじゃないか。ところが、鞭と感ぜてから、しつけするものだから、こりゃ、本当に闘争になりますよね。

真鍋 ふん、ふん、ええ。

井深 「なーんだ、親は、俺のやりたいことをさせないで、ああいうひどい目に遭わせる」ということで、反抗心が起きてくる。こりゃもう、自然のメカニズムだと思うんですけども

ね。

真鍋 そうですね。最近思うことは、育児ということ、教育ということが、ずい分……半ば商品化されて……ね。ずいぶんブームになっているんですね。民主主義の頃は放任という形、“こんにちは、赤ちゃん”という歌がはやった頃は、こんど子どもがペットになっちゃったですね。犬の代りですよ。いろいろ、子どもの食べ物とか、おもちゃとかが開発された……。世の中がこんどビジネスだということで、猛烈特訓とか、猛烈社員とかいわれだすと、子どもはスパルタ教育。本も出ましてね。最近、話題になってますけど……。それがまあ、全部、社会現象と同じ……反映なんですね。

井深 流行を追ってるわけですか。

真鍋 どんどん動いていく……ぼくは、そんなもんじゃないと思うんですね。この間もインタビューにきて、スパルタ教育はどう思いますっていうから、ぼくはスパルタ教育なんかやってないけど、ぼくのところは、スポット教育をやってます、って。

井深 ははーん、スポット教育……というの？

真鍋 どういうことか、といたしますね。ラジオつけても、テレビ見ても、コマーシャルのスポットが、ボンボンはいってますでしょ。ドラマにだって、十五分おきにスポットがはいってる……。子どものことっていうのは、そのぐらいの接点がなくちゃいかん、ということなんです。

井深 子どもとの……コミュニケーションですね。

真鍋 コマーシャルが挿入されている程度に、たびたび、コミュニケーションを入れるっていうことです。

井深 ですからね、スパルタ教育とか、放任主義とかいうのは、どっちも、全然一方的なんで……コミュニケーションがないということなんだ、と私は思うんです。だから、子どもは何を欲しているか、どういうことなら、快く受け入れるのか、といった、コミュニケーションなしに、押しつけているのが、いまおっしまったような教育なんですよ。

真鍋 そうですね。

井深 親の勝手に、ね。しかし、そりゃまあ、ゼロ歳から二歳ぐらいまでってのは、こりゃ、親の責任において、しつけてものをやらないと……。

真鍋 本人がいくらがんばったって、この時期ってのは、何もできないんですからね。

井深 繰り返しのものを拒絶しない一時期に、くりかえしのものを入れる、ということは、非常に意味があるらしいですわ。同じもの、朝から晩まで聞かされても、おとぎ話を何べんくり返しきいても、倦まない、という時には、ある程度、それは入れておかないと、いかんらしいですね。

真鍋 だけど、きかない時期もありますよ。

井深 いや、もう、その時になったら、そんなことしたら駄目です。何でもされるままになっている時期だって、やっぱり、気に入った音楽と、気に入らない音楽とがあるだろうと思いますよ。だから、親の意志を強いるっていうこと、人間的に問題があるかも知れないけ

ど、ま、親が生んだんですから……零歳から二歳くらいまでは、親が存分のことを試みるべきじゃないでしょうかね。子どもに人権ができてから、それを押しつけるってのは、私は、まちがいだと思うんですよ。

真鍋 幼稚園や小学校になると、教育の設備とか、考え方とかいろいろ研究されてるし、どんどん進んできているんですけどそれ以前の幼児というものは、全く……何もないんですね。

井深 ええ、全くないですよ。本読んだって、三歳の時から……五歳の頃は……っていうのはありますけどもね。

真鍋 それ以前はない。

井深 胎教ぐらい、ちょっとあるけど……。

真鍋 海洋開発とか、宇宙開発も大事業だろうけど……

井深 しかし、幼児開発は……。

真鍋 海洋開発や宇宙開発は、アメリカやソ連にやってもらって、こっちは、その乳幼児開発をですね……（笑い）結果みるのに、時間がかかるけれど……。

おわり